

英国文学と女性 —作品にみられる女性と人生について—

Women in British Literature: Women and their Lives in British Stories

吉野 啓子
YOSHINO Keiko

This paper is about women, especially heroines, and their lives in British stories. The first section focuses on the beginning of my research career and on my selection of authors and their stories. The second section is about the author's technique in the selected stories. The final section focuses on how the selected stories tell us how to live our lives.

はじめに

文学との関わりは、幼いころから父の影響もあって、本を読むのが好きだった。しかし特に英文学を強く意識するようになったのは、大学入学後で、授業を通して、18世紀後半以降の作品は、小説のみならず、詩も一層興味深く思えた。たくさんの作家の小説や詩、エッセイを授業で読んだり、自ら選択して読んでみたが、最終的には、英国小説に焦点を絞った。そして学部では、石田幸太郎先生のゼミを選んだ。

その当時、石田先生は Iris Murdoch の *The Nice and The Good* を翻訳しておられて、いつも翻訳中の作品や作者の事、作者が来日されて彼女と食事をしたことなどを話してくださった。それで、興味を持ったのであるが、Murdoch 自身が哲学者ということや、二十歳前後の経験のなさも相俟って、彼女の作品を研究する事は無理だと感じた。それと同時に、その難解な研究をしておられる石田先生の偉大さも痛感した。

卒業論文に誰の何を取り上げるかということになって、それまでに読んだ作品などを振り返り、Katherine Mansfield の作品を扱いたいと石田先生に伝えたが、先生は「そんなもん、しなくていい。私は、あなたの論文のタイトルをこのように決めたから、これでやりなさい」という言葉が返ってきた。「Symbols of Death in 'Dubliners' by James Joyce」と書かれた、万年筆の太くて青いしっかりとした字を今でも鮮明に思い出す。「あの～、James Joyce って読んだことがないのですが…」と言いかけると、「私の本を貸してあげる。その本を読めば、できるから」と有無を言わずの返答が帰って来た。そして先生は立ち上がられて、百科事典のような Joyce に関する本を3冊取り出して、渡してくださった。そしてその重い大きな3冊の本を抱えて、ソ

フィア館の先生の部屋を出たのが、英国文学へ入る、まさに入り口だったように思える。

1. 作品と技法

読んだことのない作品を、技法の意味も解らないままにリサーチすることになった時は、まさに暗中模索であった。石田先生に指導をお願いしたくて研修室を訪ねるも、御在室のことが少なく、やっとお会いできてそのことを話すと、「私は夜7時に寝て、夜中の2時に起きて仕事をするんじゃない。だから2時過ぎに電話をしてくれたらいい」と言われた。しかし夜中の2時過ぎに電話をするのはどうも憚れて、自分で考えて進めなくてはならず、一人登山の如くであった。

象徴技法の意味やリサーチのやり方等の本を読んだりして自分なりに理解でき、石田先生に御助言を頂きながら、何とか“Symbols of Death in ‘Dubliners’ by James Joyce”というタイトルの下で卒業論文を仕上げる事が出来た。卒業の時でも石田先生は、論文について何もおっしゃらなかったが、大学院の推薦書を書いてくださったときに、「いい論文を書いたね」と言って頂き、すぐに調子に乗る私は、大学院でもこの方法で作品を分析したいと思うようになった。またそれが、お世話になった石田幸太郎先生への恩返しだとも思ったからである。

大学院では、“A Study of *A Portrait of the Artist as a Young Man* by James Joyce”というタイトルの下で、同じ作家の作品を同じ研究方法で臨んだ。この小説では、主人公の幼少時代から青年に成長するまでの過程を、内面や言動をたくさんの象徴技法を使って描写している。特に冒頭の部分では、主人公の幼少時代の描写に象徴技法が凝縮していて、作品全体をたくさんの暗示を用いながら、我々読者に作品全体を紹介している。その技法が理解出来るたびに、作品の謎が紐解けるように感じ、難しいけれど数学の問題を解けた時のように嬉しく思っていた。

その後、主人公の成長と共に象徴技法が少しずつ減っていくが、最後まで見え隠れしていた「水」と「鳥」に焦点を当てて、主人公の内面を探っていった。この二つに焦点を絞ったのは、水は、陸を広がる物として、また鳥は宇宙空間を広がっていくものとして、すなわち、この二つを見ることで地球規模の大きな広がりを理解できるかと思ったからである。

大学院終了後は、縁があって本学に勤務させていただくことになった。学生時代に、厳しさと同時に思いやりや暖かさのある授業をしてくださった学長のSr. メリー・ユージニア・レイカー（以下、Sr. ユージニア）やSr. ヴィヴィアン・ヘズレット、Sr. メリー・ヘレン・フェレンツ、そして明治の男性を代表するような石田幸太郎先生のもとで、たくさんの教を請う事ができるという大いなる期待があった。そして同時に、そのようなシスターや先生方に、いろんな側面から、少しでも近付きたいという気持ちもあったので、お世話になろうと思った。しかし悲しいかな、私と入れ替わりに、Sr. ユージニアは、その年の3月でご退職されたと聞き愕然とした。学長室から出て来られた方は、Sr. ユージニアではなかったのである。しかし、一線から引かれたとはいえ、まだ暫くはソフィア館におられると聞き、安堵した事が思い出される。

Sr. ユージニアは、日本語があまりご堪能ではないとのことだったが、私の出演したテレビ番組の放映の時は、2か国語が出来るシスターと一緒にいつも見てくださっていたということの後で聞き、とても嬉しく思ったものである。上記4人のシスター方からは、とても大きな影響を受け、私の教員としての鑑となっているといっても過言ではない。しかしながら、未だに一歩も近付けていない自分の不甲斐なさが情けなくて仕方がない。

本学にお世話になって暫くは、石田幸太郎先生が御在職で、Joyce や Murdoch を勢力的に研究しておられたので、教えを乞うた。また自分も、作品研究を Joyce だけでなく、違う作家も研究して石田先生のご指導を仰ぎたいと思い、Mansfield の作品も取り上げることにした。学生時代は、「そんなもん、しなくてもいい」と石田先生から言われたが、「そんなもん」を、先生が推薦して下さる象徴技法で研究しようと思ったからである。

まず最初に手掛けたのが、「K. Mansfield の時に対する一考察：“At the Bay”の場合」¹⁾である。バーネル家の老若男女の日常生活を述べながら、登場人物それぞれの人生に対する姿勢が描かれている。幻滅、需要、あきらめを描写しているが、特に生や死への志向性を見ることが出来ると論じた。結核を患っていた作者が、近づきつつある自らの死期を感じ取っていることを「時」を通して、残された短い自分の「今」を描いていると思ったからである。時間的手法を用いながら、自然や登場人物の生き生きとした写実的描写があり、それをさらに象徴的技法で描いているために、文章に重厚さが加わっていると理解できた。

次の年は、石田幸太郎先生にご意見を頂きたいという思いもあって、“Symbols of Birds in A Portrait of the Artist as a Young Man by James Joyce”²⁾としてまとめた。作品は、主人公の幼い頃から成長し、exile に至るまでの過程を、様々な象徴的技法を用いながら描かれている。

その中で特に、主人公の exile と関係が深いと思われる「鳥」の象徴技法を取り上げ、色々な種類の鳥に秘められた意味を考察した。それと同時に主人公の内的状態を把握することで、より深い理解が得られ、さらに、作者の意図も併せて理解できることを論述した。

この論文の件で、石田幸太郎先生にご意見を伺ったところ、「気に入らるところがある」と言われたので、どのような点が足りないのか、どのように研究をしていけばいいのか、先生のご意見を伺う事が出来ると思った。それでお尋ねしたところ、「あなたは、私より背が高いことじゃ」というお言葉が返ってきた。論文内容や研究への姿勢についてのお話を伺えると思っていたのであるが、背がお高くない先生の可愛い（と言えば失礼であるが）本音を、垣間見たようで、今では懐かしい思い出である。

次はまた Mansfield の作品に戻って、“A Study of Symbols in ‘The Doll’s house’ by Katherine Mansfield”³⁾ というテーマで論述した。作品に現れるのは、大きくて豪華な人形の家や子供たちであるが、その奥には、階級の違いからくる差別やいじめを作者は潜ませている。そして大人のそのような醜さを理解出来ない幼い少女が、彼女の純粋な疑問として読者に問いかけている。

このように、作品に表れる人形の家と関りがある物や人物の多彩な色彩描写と共に、作者は

象徴している神や鳥の意味も探っている。作品に見られる醜い大人の世界をそのまま受け継ぐ子供たちとは対照的に、階級を越えて純粋な心を持ち続ける子供たちのちょっとした触れ合いを取り上げて、作者の人間性や主張、作品描写の技法を論述した。

翌年は、以前から取り組みたいと思っていた Elizabeth Bowen の作品を取り上げた。Joyce の作風の流れを持つ作家であるが、女性独特の感性で作品を描き、また階級社会についての言及も鋭く、其の上、作品技巧も素晴らしいものがあると感じたからである。

“A Study of the Technique in *The House in Paris* by Elizabeth Bowen⁴⁾” というテーマで、この作品の大きな特徴である flash back の技法や、言葉の選択とその効果、さらに作品全体を通して現れる「太陽」「雨」などの効果も論述している。特に第二部が flash back の技法で説明されていて、それから理解出来る大きな驚きと、同時に脇役だと理解していた人物が、作品の主人公に打って変わる意外性は、読者に衝撃を与え、注目すべき作品だと思った。

作者は、この技法を用いながら、階級社会にいる人々が常に世間体を考え、世間から自分達を守る術を常日頃から考えていることや、その社会に属さない人々との複雑な人間関係を描いている。それは大人だけではなく、子供の世界にもあり、その中で生きていけよう子供が登場人物たちにも焦点を当てられている。それは、彼らのこれからの人生への試練となるだろうが、それに対する大きな指針を、象徴技法で暗示していることも述べた。

この年は、もう一件、本学の英語英文学会誌の “*Insight*” に “A Study of Katherine Mansfield as a Literary ‘Artist’: ‘The Voyage’ and Other Short Stories⁵⁾” として取り上げた。「船出」という作品を中心に、他の作品「ブリル嬢」や「海辺にて」などを取り上げて、作者が常に配慮している「言葉」の的確な選択に注目し、五感や言葉のリズム（音楽性）から理解できる登場人物それぞれの内面や作品の雰囲気、そして作者の主張などを述べた。

またそれと同時に、作者は作中で単に「人生」と「芸術」の関連性を述べているだけではなく、作品に芸術的特性を含ませながら完成させていて、その技巧は短編という小さな世界の中で大きく花を開かせていることも述べた。

次に Henry James の作品を取り上げて「Henry James の *The Portrait of a Lady* における “threshold”⁶⁾」としてまとめた。男性の作者が、女性の行動や心理を細かに描写している点に魅力を感じたからである。また同時に、ヴィクトリア朝時代の女性がどのように人生を歩んでいたかにも興味があったからである。

作中では、全体的に登場人物が住む建物の描写が多く、その建物の特徴は、そこに住む人の特性とオーバーラップしていることに気が付いた。そして主人公に至っては、彼女の人生の変化や、大きな影響を与えるような出来事に遭遇する時は、たいてい threshold を挟んでいるか、或いは threshold を越えた時に起こっていることに気が付いた。ヴァージニア・ウルフが、窓や扉を使って人間の心や宇宙空間を操作しているように、この作者も threshold を使うのは、何か意図があると考え、それを探ってみたいと思った。そして、そこで理解出来る主人公の人生の変化、人生観の変化などを含む、多彩な変化が表現されていることを述べた。

翌年は、作風が全く違う作品を取り上げた。Joyce のときと同じく、「死」を取り上げることに抵抗はあったが、これも勉強の一つかとも思い挑戦した。「Muriel Spark の *Memento Mori* における現実認識と irony について」⁷⁾ というタイトルで、一見ミステリーのような不思議溢れる作品をリサーチした。

作者は文明社会の象徴である機械——電話、車、テレビ、ヨットなど——と老人たちを組み合わせて、彼らを現実と直面する機会を与える。そして何気ない日常生活の中で、いつの時代も変わらない真実—死—を彼らはどのようにして認識していくのかを、ミステリー的要素を加味しながら描いている。

作中では、真実を理解できない者、また直視できない者に対して、作者は容赦なくアイロニーを浴びせていることを論述した。仏教国日本と西洋の宗教の教えなどが大きく異なり、その為に理解できた事や、逆に理解に時間を要した事もあったが、学ぶ事が多かった作品である。

この翌年は、久しぶりにマンスフィールドの作品を手がけ、「Katherine Mansfield の “Prelude” についての一考察」⁸⁾ として発表した。主な登場人物は5人の子供たちで、その中で特にキザイアという女の子に注目している。好奇心の強いその女の子は、未知の世界を知りたいという姿勢が強く、その為に行動範囲が広く、対人関係も姉たちよりも多い。その彼女の内面を考慮しながら、彼女自身や周りの人物や物について考察した。

作中では、混沌としているあらゆるものが、時間をかけながら、秩序正しくなっていくことが描写されている。この事から、改題した作者の意図も理解出来、混沌としている物は、時間を掛けて心ある人によって、徐々にではあっても秩序正しくなっていく事を示唆し、彼女の改題も「時間をかけて秩序正しく」という、そのあたりに理由があった事を理解できた。

時代が平成に代わって、再びマンスフィールドの作品を取り上げた。この作品 “Prelude” は短編とはいえ、ざりとて中編としては少し短いという中途半端な作品ではあるが、何とか作品にある作者の主張を、観点を変えながらリサーチしてみたいと思い、「K. マンスフィールドの “Prelude” について—人物やシーンを中心に—」⁹⁾ というタイトルで発表した。

この作品は、それぞれの登場人物の対照的な行動や考え、そしてそれとは相反する類似性をもつ行動や考えが描かれている。登場人物同士の対比や、大人と子供の世界、男女の特性なども対比しながら述べている。これは、一方はもう一方の prelude であることを主張するための作者の手法であることと、それに加えて、さらに象徴的な手法も用いて作品を複雑に、そして完璧に作り上げていることを論述した。

翌年も同じくマンスフィールドの同じ作品であるが、観点を変えて「Mansfield の “Prelude” における植物の意味」¹⁰⁾ というタイトルで取り上げた。作品に描かれている植物に焦点を当てながら、それが人物や作品全体とどのようなかわりを持っているかを述べている。

植物の持つ意味や特性、あるいは象徴や語源を基に、その描写との関りを説明した。また同じ物に対する人々の見方の多様性や、見る人の年齢や考え方などによって大きな相違があることなどを詳細に分析した。

更にその翌年、マンスフィールドの晩年の作品を取り上げて「Katherine Mansfield の晩年の作品について—“At the Bay”、“The Garden Party” “The Doll’s House”、“The Fly”、“A Cup of Tea”を中心に」¹¹⁾ というタイトルでリサーチした。

これらの作品は、全く違う世界を作り上げているといわれているが、そうではないと考え、これらの作品の共通点と考えられるいくつかのポイント—美への願望、階級、兄弟愛、そして死—について解説し、それぞれの作品の特徴にも言及した。どの作品にもみられる類似性が存在しているが、彼女の作品は、それらに加えて色彩感に溢れ、さらに構成の確かさや含蓄のある内容のものが多く、その充実した文体について論述した。

暫くマンスフィールドの作品が続いたので、翌年の平成5年は作者を変えて、エリザベス・ボウエンを取り上げ、「E. Bowen の *The House in Paris* について—三つの家の意義」¹²⁾ というタイトルでリサーチした。

人は環境によって創られるといわれるが、その環境の一つの要素として「家」があると考え、この作品に表れる三つの家を取り上げた。それぞれの家に住む登場人物の人間性や生き方、人生観や社会観などを解説している。また、人間の孤独にも言及し、それは環境や運命、そして世間や人物を熟知していないことなどに関連して、それぞれの組み合わせやバランスなどで生活に大きな変化が現れ、それが、それぞれの人生になることを論述した。

翌年は再びマンスフィールドの作品に戻った。彼女の作品の中では、特に知られているとはいえない作品であるが、他の作品にはないユニークさがあると思い「Katherine Mansfield の “Daughters of the Late Colonel” における喜劇性について」¹³⁾ というタイトルで取り上げた。

この作品は、タイトルから連想する死や、そこから生まれる陰気な雰囲気とは裏腹に、caricature 的な要素があると判断した。軍人であった父親には一切逆らう事などなかった姉妹が、父親亡き後もその慣習が続き、堅い父親に対する何処か間の抜けた娘たちの言動のコントラストがある。これらの要素を、それぞれの登場人物の描写から読み取り、彼らの特質を探った。その結果作者は、人間の愚かな習性をユーモアやアイロニーを使って、或る人間にとっては生真面目な行動で会っても、他者からすれば喜劇的な要素となることを提示していると論述した。

翌年も同じくマンスフィールドの作品を、「Katherine Mansfield の “The Voyage” について：作品、そして背景の今昔」¹⁴⁾ というタイトルで発表した。母を失くしたばかりで、初めての船旅をする主人公である少女の不安な内面を、作者の周到な技法で作品を完璧なものにしている事を解説した。

夜遅い時間、それに母を失くした不安や父と離れて祖父母の家に向かう不安などを、多角的観点で描写している。その技法は、場面となった場所がそのように誘うのか、それともやはり作者の技量に拠るものなのかが気になった。それで、この船旅と全く同じルートで旅することで、作品の側面、或いは一部分でも実感できるかもしれないし、同時に、作者の感性や技巧面などの理解も深められるかもしれないと思い、実行することにした。

この作品と同じルートで船旅をして、作者の技巧は勿論であるが、背景の今昔も共にまとめたのが、この小論である。船のルートは今でも勿論同じであったが、航路の時間は約半分近くに短縮されていて、その為に、夜の出発は今では無くなっていた。その為に、辺りの暗さ等は実感できなかったが、作中で、少女が祖父母の住む町に漸く到着した時の気持ちは、味わうことが出来て、少女同様に嬉しかった。作品と隔たりを感じることは、時間の長短や状況などで勿論大きく異なるが、当時のままと感じられるものを目の当たりにして、作品の醍醐味を味わえた事も多かった。

出発する港は近代的な輸送システムが整っていて、それに日中という事もあって威圧感など全くなかったが、内海から外海に出る時の大きな揺れは昔も今も変わらずで、少し動揺した。初めての船旅で、他にもたくさんの不安を持って乗船している少女の内面を、この波の状況を加えることで、彼女の不安をさらに高めている作者を、実際に乗船してみて理解する事が出来たことで、その作者の卓越した技法に感服したことなどを述べた。

平成7年にも、やはりマンスフィールドの作品を「Katherine Mansfieldの"Miss Brill"について—孤独の一考察」¹⁵⁾として取り上げた。この作品は、タイトルから受ける若さ溢れる生き生きした印象とは正反対の「孤独」を述べている。その意外性に着目し、人間の外面と内面には、計り知れない大きな相違がある事を論述した。

タイトルから、澀刺とした若い女性で、毎日を楽しく過ごし、人生を謳歌していると誰もが想像する。しかし実際はそれとはまったく違って、ミスではあるが老女で、孤独な日々の生活を送っている。作者はその孤独な老女を、それに関連する言葉を一切使わず、間接的に五感で、詳細に彼女の現実を描写している。

またこの五感の描写以外では、「～らしくない人(々)」を登場させて、本来の姿はどうあるべきかと我々読者に問い掛けている場面もある。主人公の内面を多角的に、そして複雑に描写しながらも、人間の本来あるべき姿を、道徳的側面も加味しながら作品を完成させている。タイトルと内容の正反対の相違を描写しながら、人間の外見と内面の大きな相違を示し、外見だけで人を判断する人間の卑小性を皮肉っている作品でもある。

この同じ年の10月に、同じ作家の同じ作品を、違う観点でリサーチして"A Study of Solitude in 'Miss Brill' by Katherine Mansfield"¹⁶⁾として他大学大学院英文学会誌に発表した。

この作品は、学生時代からとても気になっていた作品である。しかしながら、兎に角一つの真理に幾重ものベールで包まれていて、一枚剥がしてもまだまだ幾重にもベールが巻かれているように見え、なかなかその真髄が理解できなかった。それで、先に発表した五感を使った観点での考察以外の技法で主人公の内面をリサーチすれば、より詳細なことが理解できるかもしれないと思い、それをテーマに論述した。

頻繁に取り上げているマンスフィールドは、33歳にして結核で亡くなっている。人生これからという時に、常に死を感じながら人生を歩むことをどのように感じていたのか。関連書籍で理解出来るものの、それが作品にどのような影響を与えているか、それを知るには、作品を深

く掘り下げて理解することだと思い、更に彼女の作品をリサーチし、平成8年に2本の論文を発表した。

まず紀要では「Katherine Mansfieldの“A Cup of Tea”について－主人公の人間性を中心に」¹⁷⁾というタイトルの下で、作品にみられる伏線や象徴技巧に注目しながら、主人公の物欲、名誉欲、虚栄心、自己陶醉、そしてコンプレックスなどを探った。そして、そこに見られる女性の、また人間の卑小性を論述した。

また英文学会誌では、「Katherine Mansfieldの“Life of Ma Parker”における‘a hard life’の意味について」¹⁸⁾を発表した。孫を亡くした老婆の、ある1日の僅かな行動と、その間にみられる彼女の意識の流れに注目する。この技法で、彼女の過酷な生活環境や、孫を亡くしたという境遇などが語られる。また現実においては、加齢に伴い見られる彼女の老化や、それに加えて次々と彼女に起こる辛い出来事は、高齢の彼女を更に窮地に追い込み、痛めつけている事が語られる。現状描写と技巧、そして作者の実生活（病気の悪化）を考えると、何度読んでも人生の辛さを沸々と考えさせられる作品である。

マンスフィールドの作品は小品ではあるが、なかなか味わい深く、リサーチのし甲斐があると思っている。そのために、また違った作品を取り上げて「Katherine Mansfieldの『はじめての舞踏会』一時のとらえ方についての一考察」¹⁹⁾と題した。まず、作者のいつもの手法で、主人公の社交界デビューを台無しにする男性を通して、タイトルから受ける印象とは全く違う内容の作品であることを論述する。この初老の男性から、女の子は晴れの舞台である社交界デビューで、人はすぐに年をとり、醜くなるものだと言われ、悲しい思いをする。しかし彼女は健気で賢い女性であった。現実をしっかりと把握して、時間というものはいくつも経過していくものと理解し、再びダンスに興じるのである。

これは、社交界デビューの女の子の話ではあるが、結核のために転地療養を余儀なくされていた作者の、「現在」を愛する姿勢、社交界デビューのように嬉しく感じる「今」を愛する作者の心境であることを説いている。

翌年に発表した「K. マンスフィールドの『新しい服』における一考察—登場人物を中心に—」²⁰⁾も小さな女の子、社交界デビューするよりもっと小さな、小学生が主人公である。この作品は、作者が生前に自分の作品集に加えなかった作品である。なぜ加えなかったのかというと、ある意味、切れ味のない作品であったからだと思う。それは、作品の始めから、それぞれの登場人物が意識の流れの下で、妻は夫や姑、子供たちの事を思い、姑は嫁や孫、家具などについて思いを巡らせ、二人それぞれが不満をちらつかせる。その場面が、陰鬱で、霧がかかったような、そしてうんざりするような場面を想像させられる。この理由から、マンスフィールド独特の軽快な切れ味のする作品ではないので、作品集に組み入れなかったのだと考えられる。また登場人物それぞれの特質に、ある種の皮肉が込められていて、それは、作者の後の作品の「芽生え」という息吹が感じられるように思える作品であると論じた。

マンスフィールドの作品は、さらに研究の余地があると思っていたので、この後、平成14年

(2002年)から4年続けて、彼女の作品をリサーチした。まず「K. マンスフィールドの『カナリア』にみられる孤独、死、そして美について」²¹⁾と題して、三つのテーマを取り上げた。この作品は、彼女の芸術的才能の絶頂期に書かれた作品で、完成作としては最後のものであるために、研究のし甲斐があると思ったからである。作品は、予想を裏切らず、芸術や美が我々人間にとって必要不可欠であることを、孤独な老女とカナリア、そしてカナリアの死を通して訴えている事を論述した。

翌年には、風変わりな作品「蠅」を取り上げ、「K. マンスフィールドの『蠅』について—作品にみられる死の観点から—」²²⁾と題して発表した。彼女自身、友人のドロシー・ブレットへ「『蠅』という風変わりな作品を書き終えたところです」²³⁾と書き送っている。

インク壺で溺れている蠅と、それを助ける主人公の社長。この蠅と社長を、シェイクスピアの「リア王」の一節を引用すると、見事に、蠅の死、そして主人公や彼の息子の死を、多角的、かつ冷静な見解で描写されていることがわかる。またそれを、たくさんの伏線を準備している彼女の技法は、見事なものだと説いた。

次に、完成した時期が不明で、作品についての批評が極端に少ないなどの理由で、他の作品とは違っているとされている小品「声楽の授業」を取り上げた。そして「K. マンスフィールドの『声楽の授業』における芸術性について」²⁴⁾としてリサーチした。

作者自身の言及がみられないので、彼女の主観は理解出来ないが、自分なりに音楽を骨組みとして考えた。教室では、斉唱(全員同じメロディーで歌う)から始まり、コントラルト(女性の最低音域)が加わり、徐々に大合唱となる。指揮をしながら主人公は、婚約者との出会いから、婚約破棄までのことを、思い起こす。意識の流れの技法を見事に使って、少女たちの悲歌と主人公の婚約破棄という悲しい出来事を意識下で合致させている。この彼女の素晴らしいテクニクについて論述した。

次に、マンスフィールドが友人のコテリアンスキーに出した手紙で、自信の程を示している「園遊会」を取り上げた。「園遊会」というタイトルであるが、肝心のパーティーに関する描写はごく僅かである。それなのに、作者は自信があるとし、実際に作品は称賛され広く読まれている。その魅力は何処にあるのか知りたく思い、「マンスフィールドの『園遊会』における一解釈」²⁵⁾として発表した。

彼女の作品は、冒頭に必ず大きなヒントとなることばや記号を示していて、それが作品全体に大きな影響を与えている。この作品も例外ではない。作品冒頭にも係わらず接続詞“And”から始まっていて、理想的なパーティー日和の朝を強調していることから始まる。これだけではなく、この作品は、作者の作品への姿勢「一語の置き違いもあってはならない」があちこちにみられる。そしてそれが、作者の自信になっていると思い、言葉を中心に、作品内容を読み説き、同時に、作者の人生に対する思いも論じた。

マンスフィールドには、まだまだ魅力的な作品があるが、彼女の作品以外も研究したいと思うようになり、ジョージ・エリオットの作品を取り上げた。そして「ジョージ・エリオットの

『サイラス・マーナー』における象徴的技法の一考察」²⁶⁾と題して、作品に見られる数多くの「例え」や色彩を通して、作者の象徴技法を述べ、それが作品の展開に大きな係わりを持っている事を論述した。そして、その技法を詳しく解説しながら、この作品の完成度の高さも併せて述べ、まとめた。

エリオットの作品をリサーチし始めたものの、まだまだマンスフィールドの作品もリサーチしたくなった。そして彼女の人生と作品の関りを考えたいと思って「キャサリン・マンスフィールドの生涯と作品に見られる植物について」²⁷⁾というタイトルで、リサーチをした。彼女のどの作品にも、植物が多かれ少なかれ描かれていて、どの植物にも作中で重要な意味を持たせて作品を展開させている。誰もが見ることが出来る花々も含めて、彼女が生涯を通じて愛した花を、作中で自らの主張を象徴的に表現していることに焦点を当てた。

この少し以前から、児童文学の授業科目も担当することになっていて、幼児絵本を始めとして、日本や諸外国の少年少女の書籍も取り上げていた。その中で、どの少女も一度は読むという「赤毛のアン」も取り上げるようになった。この作品世界を実感するには、やはり現地視察だと思い、夏休みを利用してプリンス・エドワード島を視察した。島全体が作品世界そのもので、島民たちそれぞれも、作者や作品を誇りに思っておられた。この島や島民の生活環境、風習、また島内で見られる作品世界を観察した。

その後、ボストンに移動してコンコードへ。そこで再び「若草物語」の舞台となった建物や町全体の様子、更に南北戦争の舞台となった場所も視察し、それらもまとめて、今はすでに廃刊となった『教育のプリズム』（ノートルダム女学院刊行）に「『赤毛のアン』の舞台、プリンス・エドワード島と『若草物語』の舞台、コンコードを訪ねて」²⁸⁾というタイトルで発表した。

この翌年、マンスフィールドの作品をまとめて、1冊の書籍²⁹⁾にまとめ上げた。これは、これまで書き溜めた彼女の作品を、年齢や階級社会などで分けながら、技巧、動植物、色彩感、人生観、作風、テーマなどを、作品ごとに分かりやすく解説した。初心者、特に本学学生が、文学作品の良さを理解し、興味を持つように、現地取材の写真や、ニュージーランド国立図書館アレクサンダー・ターンブル・ライブラリーのご協力で、特別に見せて頂いた彼女の遺品を始めとするたくさんの物を、図書館の許可を得て撮影させて頂いた写真とともに、またその図書館で手に入れたもの等も掲載している。

2. 作品と人生のとらえ方

マンスフィールドの研究も出版して、一段落したように感じたので、次は、他の作品の登場人物の人生のとらえ方に注目するようになった。特にジョージ・エリオットやブロンテ姉妹、ボウエン、ウルフなどの作品を取り上げ、分析した。

まずエリオットの作品を「ジョージ・エリオットのサイラス・マーナーについて—環境と人々を中心に」³⁰⁾として取り上げた。「環境は人を造る」というが、この作品はまさにそうで、独

身男性の主人公は、親しい友人に裏切られた後、それを忘れるために見知らぬ土地にやって来て、ただひたすら機を織る孤独な生活をしていた。しかし母親に死なれた身寄りのない乳幼児を育てることになる。そのことから徐々に村人たちと溶け込み、その乳幼児を、人間味あふれる人物に育て上げ、また同時に自らも人情味溢れる人生を歩むという人間模様をまとめた。

この作品を授業で取り上げると、男性主人公の人生の歩み方や、作者の作品技巧などに興味を持つ学生が多く、感銘を受けたとって卒論に取り上げる学生が多いので、嬉しく思っている。それで、今度は女性の主人公の人生模様を、と思い、ボウエンの作品を取り上げ「エリザベス・ボウエンの『パリの家』における女性たち」³¹⁾と題して発表した。

パリ市内にある小さな家で、過去に起こった出来事が、現在に生きる子供たちに大きな影響を与えている事を、フラッシュバックの技巧で描かれている。そして、それが現在起こりつつある出来事に係わる人々（大人も子供も含める全ての人物）の生活環境や人間性を通して、人生への様々な対応に言及している。

本学に勤め始めて間もない頃に、ある先生が「若い頃には理解できないことでも、年を取ったら手に取るように分かるものや」と仰ったことがあった。それは経験ということかなと思っただが、この言葉を理解出来ないまま、しかし、いつも心の片隅にあって、年月が過ぎ去っていた。その間、作品を研究するに至ってのテーマは、変わらず作品の技巧となっていたが、先の先生から言われた言葉が、何となく理解できるようになったのか、徐々に登場人物の人生の歩み方、人生観などに焦点が移っていった。また年を重ねながら、たくさんの人をみて来た事で、登場人物の内面を探りたい心境になった。

丁度その頃は、マンスフィールドから少し時代を遡ってジェイン・オースティンをリサーチしていたが、彼女の作品は社会階級という枠があり、その中で生きる女性たちの事が描かれている。中流階級の女性たちの様々な人生が描かれていて、あまり大きな変化のない日々を過ごしながら、恋愛そして結婚という事が大きな人生の出来事として取り上げられている。

しかし社会には、色んな階級があり貧富の差もあり、女性であっても結婚が人生の大きな目的として考えていない人だっている。枠のない社会で生きる女性の人生を注目すべきではないか、と考え、ヴィクトリア朝時代の作品に戻り、エリオットの作品を初め、ブロンテ姉妹、ヘンリー・ジェイムス、ヴァージニア・ウルフなどの作品を取り上げて、作品に表れる社会の状況や登場人物の生き方に焦点を当てることにした。これは同時に、授業でも取り上げて、学生とも討論が出来るし、登場人物によっては同じ世代の女性として、学生たちに生き方を考える機会を与えられるとも思ったからである。

これらの作品の中で、注目されたのが階級、貧富、権威などから発生する、弱者に対するいじめであった。作品の中のそれは、様々な形で描写されていて、それは決してその当時だけの、またその国だけの問題ではなく、現在、日本国内でもその話題が頻繁に耳にするようになっていたことから、「いじめ」の話題にまず焦点を当てた。

また自分の周りを見ると、作品で表現されている以上に卑劣で、卑怯な事を平気でしている

人（たち）がいる現実、その反面、その為に純粋に生きている人々が悲しい思いをしている現実がある。人を正確に理解する事の難しさ、他人の卑劣極まりない言動、冷血さ、不可解さなどを痛感する事も多々ある。挙句の果て「正義は負ける」と断言する人もいて、それを聞いた時は、打ちのめされた感じがした。世の中の忌まわしいじめ、ハラスメントの被害やその防止策を少しでも学んでもらいたい為に、人生をいかに生きるかを、作品を通して考えることにした。

その一つとして、授業で学生たちに、今までの自分を顧みて、いじめられたり、いじめたことなどがあつたら、それをまとめようと提案した。強制的ではなく、書く話題がなければ書かなくていいし、また名前も書かなくていいと学生に提案した。提出を義務付けられていない、期限もなく、しかも名前も必要ない提出物を取って提出しないだろうと思っていたのであるが、予想以上に殆どの学生が提出してきたのには、驚かされた。

幼稚園時代からすでにいじめられていて、その想像を絶するいじめ方のひどさなど、彼女たちの提出物を読み進めると、そのあまりにもひどい様子に愕然とし、それを書くように指示した自分は、なんと残酷な人間だと反省した。それと同時に、そのような辛い経験をしてきた学生たちが愛おしくてならなかった。その彼女たちの為に、まとめて一冊の本として社会に提示し、他人をいじめることは、他人の心を傷つけることで、怪我して出来る傷は治癒出来るが、心の傷は一生治癒出来ないものなのだと言う事を、彼女たちの代わりに訴えることが使命なのではと思った。そしてそれが彼女たちへ、私が出る唯一のことなのかもしれないとも思った。

その後、彼女たちの原稿をまとめ始めたが、彼女たちの、悲しさ、辛さ、悔しさ、そして無念さなどが自分の心に深く入り込み、気が滅入り、なかなか進めることが出来なかった。しかし、出版社さんの励ましで、何とか1冊の本にまとめることが出来た。表紙は、当時のゼミ生が、自分もいじめられた経験があるので、いじめられている人が元気になるようにと、かわいいイラストを書いてくれた。そして題字はいつも書道展で賞をもらっている友人が書いてくれて、1年以上の年月を要してやっと完成できた。³²⁾

この書籍出版後は、内容の「いじめ」に関して、新聞やジャーナル、各自治体の広報誌、そしてラジオ等のマスコミで取り上げて下さった。また、幾つかの教育委員会からの講演の依頼もあったので出掛けて行き、学生たちや卒業生達の悔しさや無念を訴え、いじめで嫌な思いをしている方々が少しでも少なくなるようにと訴えたつもりである。

有名作家の作品を読み説く事はとても学ぶ事も多いが、身近な人や、人との出会いという経験から、自らエッセイや詩を書くことで、自分の考えや生き方を世の中に知らせる事も大切ではないかと思い始めた。その為に依頼された場合は勿論の事、自分が書きたいと思う項目を書く機会も多くなった。特に新聞や広報誌、新聞は京都新聞や全国紙等で再三取り上げて頂き、自分の意見や考えを発表する機会を与えて頂く事も多くなり、同時に人や物事、自然等を深く観察するようになり、学ぶ事が以前より多くなった。

そんな中、ミレニアム（平成10年過ぎ）頃から、学生の夏季英語研修の引率で、4週間ほど

の海外出張があった。引き受けたものの、30人程の学部学科を越えた学生の引率は、日・祝日関係なく、しかも24時間労働のようなものであると、現実に直面して理解出来た。

我が学科では、教員は、少なくとも1度は引率するというルールの下にあったので、早めに任務を終えようと思って志願したのであるが、どう言う訳か、それ以後、4回の出張となった。毎回、予想だにできなかった事が、学生に、研修先の大学に、そしてホームステイ先に起こり、その度にハラハラドキドキの連続であった。これから先、まだ経験しておられない先生方の参考になるかもしれないし、また学生たちとの思い出にもなると思って、それまでの夏季研修引率の出来事をまとめた。³³⁾ カナダの研修先の大学関係者は、とても喜んで下さったが、本学の関係の方から「こんな本を読んだら、誰も引率してくれはりませんわ」と言われ、がっかりした事を覚えている。物の見方は、人それぞれだと言う事を痛感させられた出来事である。

その後も暫くは、エッセイや詩を中心に全国紙に掲載して頂く機会が多々あった。その他に、相変わらずいじめ問題が世間で問題になっていることから、兵庫県教育委員会の要請で、明石市人権啓発課主催の講演や川西市教育委員会主催の講演依頼に向いて、いじめに対する防止や取り組みについての講演を続けた。

また母校の中学校で「英語を学ぶ喜び」と題して、英語を学ぶことで、どのような発見や人間関係が生まれたかを中学生に話したり、島根県立の高校では「英語圏の文化と英語を学ぶ喜び」と題して、高校生用に少しレベルアップした内容で話したりもした。英語を手段としての異文化体験の話題は、彼らにとって初めてだったのか、目を輝かせて聞いてくれていて、話しながら高校生の様子を見て感動していた自分を思い出す。

最近では、あるロータリークラブ主催のスピーチコンテストの審査委員長として、一年に一度の小、中学生のコンテストを見守っている。初年度から5年以上経つが、年々参加者が増え、レベルアップしている子供たちの様子を見ながら、「英語を武器として、世界に羽ばたいて下さい」と毎年言って、彼らを励ましている。

ヴィクトリア朝時代の作品を取り上げることから始まり、登場人物の人生の取り組みへの考察を続けている。学生や学生がこれから歩むであろう人生の未来に、少しでも寄与できるようになればと願っているからである。英語英文学科であることから、授業では原文を読みながら、学生たちの人生と照らし合わせて考えるようにしている。最近の学生たちの読解力は、優れているとは言えないが、それでも原文に接して欲しいというのが、自身の切ない願いである。しかしそんな考えとは裏腹に「難しい」「解らへんのに、こんな本買うてもったいない」等という学生もいる。これも時代の流れとして捉えるべきなのかとしみじみ思い、考え込んでしまう昨今である。

ヴィクトリア朝の作品にもどると、地位や名誉のある者が、全くない者への虐待、謗りなど、また養護施設を開いていて、一見正道のようであるが、政府の援助金から莫大な金額の詐取など、卑怯な方法で世渡りをする輩、同僚の嫉みや謗り、裏切り等々が描写されている。まさに小説は、人々の人生や社会の縮図である。時代や国、人種、ことばが違っても、人間の営みがある

ところには、様々な形で、このような事がある。しかし、それを最小限度に食い止められるような人間性を具えなければいけないし、その事はリサーチを通して自分も把握し、他者にも訴えていきたいと常々思い、現在に至っている。

おわりに

在職中に手掛ける事が出来た研究についての一部を、簡単に紹介してきた。この他にも研究論文や私的なエッセイ本、詩集などもあるが、あくまでも私的な内容であったり、論述する程の内容でもないと思ったので省略した。

春ののどかな昼下がりに、ゆっくりと時間が過ぎていくが如く雰囲気、以前には学内に漂っていたように思う。下剋上の野武士の世界のような、また独裁者が存在する世界とは全く無縁の領域だったようにも思う。その領域の中で、シスター方や教職員全員が力を合わせて大学を盛り立て、全員で力を合わせて運営されていたように思う。また学生への教育面での厳しさや、他者への配慮などを含む徳育面も、学科学部を越えて、教職員が一丸となって教え導いていたと思う。そのような時期に一員となっていた事を、今では懐かしく、又誇りに思っている。

教育に関しては、少数精鋭という素晴らしい環境の中で、学生たちと楽しく、或る時は厳しく接しながら、彼女たちと過ごし、社会に送り出す事が出来たように思う。また研究生活においては、不器用な自分であるが、何とか時間のやり繰りをして、少しずつではあるが歩み続けることが出来たのではないかと思っている。このように、教育、研究生活を送ることが出来たのは、教職員の皆さまの支えがあつてのことで、深く感謝しております。最後になりましたが、皆様に心よりお礼申し上げます。有難うございました。

引用文献

1. 榎並 啓子 (1977) 「K. マンスフィールドの時に対する一考察：“At the Bay”の場合」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 9, 1-9.
2. ——— (1978) “Symbols of Birds in *A Portrait of the Artist as a Young Man* by James Joyce” ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 10, 11-21.
3. ——— (1982) “A Study of Symbols in ‘The Doll’s House’ by Katherine Mansfield” ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 14, 15-23.
4. ——— (1983) “A Study of Technique in *The House in Paris* by Elizabeth Bowen” ノートルダム女子大学 研究紀要 第13号、1-10.
5. ——— (1983) “A Study of Katherine Mansfield as a Literary “Artist”: “The Voyage” and Other Short Stories” ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 15, 36-50.
6. ——— (1985) 「Henry James の *The Portrait of a Lady* における “threshold” の意義」 ノートルダム女子大学 研究紀要 第15号、65-69.
7. ——— (1986) 「Muriel Spark の Memento Mori における現実認識と Irony について」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 18, 1-16.

8. ————— (1987) 「Katherine Mansfield の “Prelude” についての一考察」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 19, 1-16.
9. ————— (1990) 「キャサリン・マンスフィールドの “Prelude” について——人物やシーンを中心に」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 20 号、37-51.
10. ————— (1991) 「Katherine Mansfield の “Prelude” における植物の意味」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 21 号、1-14.
11. ————— (1991) 「Katherine Mansfield の晩年の作品について—“At the Bay,” “The Garden Party,” “The Doll’s House,” “The Fly,” “A Cup of Tea” を中心に—」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 22 号、23-33.
12. ————— (1993) 「Elizabeth Bowen の *The House in Paris* について—三つの家の意義」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 25、35-50.
13. ————— (1994) 「キャサリン・マンスフィールドの “Daughters of the Late Colonel” における喜劇性について」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 24 号、61-76.
14. ————— (1994) 「キャサリン・マンスフィールドの “The Voyage” について：作品、そして背景の今昔」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 25 号、27-40.
15. 吉野 啓子 (1995) 「Katherine Mansfield の “Miss Brill” について —— 『孤独』の一考察」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol. 27, 49-65.
16. ————— (1995) “A Study of Solitude in “Miss Brill” by Katherine Mansfield 京都女子大学大学院英文学会 Wisteria No. 3、76-92.
17. ————— (1996) 「Katherine Mansfield の “A Cup of Tea” について——主人公の人間性を中心に——」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 26 号、65-79.
18. ————— (1996) 「Katherine Mansfield の “Life of Ma Parker” における ‘a hard life’ の意味について」 ノートルダム女子大学英文学会 Insight Vol.28, 33-56.
19. ————— (1998) 「Katherine Mansfield の『はじめての舞踏会』—一時のとらえ方についての一考察—」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 28 号、33-41.
20. ————— (1999) 「K. マンスフィールドの『新しい服』における一考察—登場人物を中心に」 ノートルダム女子大学研究紀要 第 29 号、87-101.
21. ————— (2002) 「K. マンスフィールドの『カナリア』にみられる孤独、死、そして美について」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 32 号、149-155.
22. ————— (2003) 「K. マンスフィールドの『蠅』について—作品にみられる死の観点から—」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 33 号、109-115.
23. Katherine Mansfield, *The Letters of Katherine Mansfield* ed. by J. Middleton Murry (London: Constable & Co., Ltd., 1928), Vol. II, P. 187-8. (14 February, 1922)
24. 吉野 啓子 (2004) 「K. マンスフィールドの『声楽の授業』における芸術性について」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 34 号、15-23.
25. ————— (2005) 「マンスフィールドの『園遊会』における一解釈」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 35 号、61-70.
26. ————— (2006) 「ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』における象徴的技法の一考察」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 36 号、87-100.
27. ————— (2008) 「キャサリン・マンスフィールドの生涯と作品にみられる植物について」 京都ノートルダム女子大学研究紀要 第 38 号、29-39.
28. ————— (2008) 「『赤毛のアン』の舞台、プリンス・エドワード島と『若草物語』の舞台、コンコー

- ドを訪ねて」学校法人ノートルダム女学院「教育のプリズム」7号、109-121.
29. ————— (2009) キャサリン・マンスフィールド 作品の醍醐味 東京 朝日出版社
 30. ————— (2010) 「ジョージ・エリオットのサイラス・マーナーについて」京都ノートルダム女子大学研究紀要 第40号、39-58.
 31. ————— (2011) 「エリザベス・ボウエンの『パリの家』における女性たち」京都ノートルダム女子大学研究紀要 第41号、93-107.
 32. ————— (2011) いじめからあなたの笑顔を取り戻したい 浪速社 大阪
 33. ————— (2015) 英語海外研修 シャペロン奮闘記 浪速社 大阪